

蠅螂の斧

# 次の一步

社会システムを変える

第1回

## 地域子育てネットワーク

何事にもきっかけは必要だ。この連載を開始するそれは2016年9月に長崎・ハウステンボスで開催される日本家族研究・家族療学会である。そこで私は「木陰の物語」パネル漫画展をする。そしてワークショップも担当する。更に、自主シンポでの助言者も卒院生の依頼で引き受けた。また、同学会誌には10年余り「連想映画館」という4頁コラムの連載も続けてきた。それを今年度いっぱいまで終える事になっている。そんなこんなでまあこの際、一度くらいいいか！と思って、六十代のフィナーレにあれこれ受けることにした。

しかし長崎大会会長・児島達美さんからの提案、「東豊さんとのコラボWS」なんて、何が出来るんだろう？、そう思いつつ、まずは一度打ち合わせをしようと言うことになったのが3月下旬。ところが約束当日、児島さんは緊急事態で来られなくなり、京都駅ビルのがんこ寿司で東さんと二人（急なキャンセルはきかないので、食べ役に一名、龍大院生同行）での話になった。そこで話しているうちに、今語りたいテーマの中核が「社会システムへの変化処方」であることに改めて気づいた。そして一任された大会WS案内文にこう書いた。

### 家族支援入門の東門・西門・南門・北門

入門の入口にも四方あります。2016年3月19日、京都某所でたつぷりと、このWSのための打ち合わせをしました。そこで、参加者があらかじめ予想するような、私達も飽きているような展開はやめておこうと合意しました。ただ、初学者、フレッシュマンに不親切な業界語りにもしたくない。やはり、学会のWSであることは踏まえておきたいと話しあいました。

そこで今回は、滅多に顔を合わせる事のない二人で、切り口を少しサイズアップして、社会システムというものをまな板の上にあげる事にしました。この切り口での入門です。これには団の意向が強く作用しています。東は「なんでもええですわ！」と言いました。

実は今回の学会では、別のスペースで家族マンガ展が開催されていますし、学会誌には映画の連載を10年も続けています。私のやりたい放題みたいですがご容赦いただいて、そんな素材も使って、(1)団が語り東が問う、(2)東が語り団が問う(3)参加者が小グループになって、自分の周りの社会システムの課題を語り、二人の話を受けて介入を話しあってみる、という時間配分を考えました。

果たしてこれが面白くなるのか、期待はずれになるのか、責任は持ちかねます。面白くなればいいなあとは思っていますが、どうなるかはライブですから、参加者の皆さんと大いなる方の御心のままです。

(文責 団士郎)

システムは部分が全体と連動している。始まりと終わりは直線的に因果で結ばれたりしてはいない。「風が吹いたら桶屋が儲かる」、これを因果論的に説明したものは落語にはなっても、合理科学にはならない。しかし現実には、そういうことが多々ある。

この連載を書き始めるに当たって、構成をどうするかについては随分思案した。そしてたどり着いたのは、システムについての文章を書くのに、全体を計画性、必然性で貫いた構成を考えるのはシステム論的ではないということだった。そして、これがシステム論か？という批判も又、システム論的ではないと思う。

どこから、なにから書き始めても、私の考える社会システムの一相面であるに決まっている。小さな出来事が結果的に全体システムを引っ張ることになっていたりするのは周知のことである。書き連ねていく内に、その文章がそこにあるシステムを照らし出し、少し動かしてくれる。そんなことになれば嬉しいが、そうなるかどうかは分からない。

## システム論

社会システムを考えること、それに小さな変化を処方することはそれ程難しいことではない。もう少し厳密に言えば、「ひとつ追加」はそう困難ではないと考えてきた。

一方、世の中も人もそう簡単には変わらないこともまた承知している。私はこの兼ね合いについて、こんな整理をしている。

客観的に事実をとらえれば、あらゆる事が日々変化している。時と共の緩やかな変化には、人は意外なほど従順だ。しかしそこには、現象的事実と感情的事実が横たわっているようだ。

こんな例をあげると分かりやすいだろうか、それともかえってややこしくなるだろうか。

バンジージャンプの台の上で飛ぶのをためらっているのは感情以外のなにものでもない。身体現象の事実としては、誰であろうと押されれば落ちてしまう。そして落ちて死ぬことはまずない(多分)。「死ぬほど怖かった、二度とやらない」という感想は当然だろう。でも、突き落とされるのに、勇気も決断力も要りはない。

だがこれを「意志に基づいて飛び出す」という話にすると、ややこしくなる。無理してそんなことをするのに意味があるのかとか、トラウマになる、悪影響だなどと言い始めると議論ばかりが長引いて、聞きかじりの説明世界の虜になる。そんな一つ一つの説明概念をドンドン採用して自分を固めてしまうのが好きな人は、そうしか生きようがないのかもしれない。

だが、水に飛び込んだら助かったものを、高所恐怖症だから飛び込めなくて、ベランダで火の手に飲み込まれて亡くなった、などというシチュエーションを、もつともだなどと共感する理由が分からない。

その人の命を守るのが第一だと考える時には、気持ちや意見など聞かないことだ。無論、命より意見や感情が大事だと考える人の自由は認めたらよい。その上で、圧倒的多数の人々は、意見よりも結果に支配されるところが大きいことを、もっと真摯に受け止めねばならない。

映画「明日に向かって撃て！」で、ブッチ・キャシディとサンダンス・キッドは追い詰められた崖から、手に手を取って谷に飛び込む。その時一方は「俺、カナヅチなんだ！」と告白している。

社会の仕組みの変化を阻止しているのは多くの場合、人の主観的どころというものである。人のところが人の世を、困難から脱却できにくくしている。無論私とて、これが分からないわけではない。愚かしいとも思うが、人間とはそういうものである。そして、愚にもつかない説明が巷に溢れる。

しかし一方で、だから人生は楽しく豊かなのではないかと語られると、そういうところがあるのを否定できない。全くもお哀しくも愛おしい人間よ！といった気持ちになる。

そんな既成の勢力バランスに変化を挑もうとするようなことを言うのは、まさに「螻蛄の斧」だ。イメージは巨大風車に突撃するドンキホーテ。

クールに見通すなら、一矢報いることくらいは出来るだろうが、それを社会が継続するのは難

しいだろう。

スマホや車、酒やコカイン、宗教などのように、大多数の人々を魅了して離さないような吸引力を持つ装置でない限り、マイナーなチャレンジは社会システム全体の中では敗北を続けるしかないだろう。つまり、元の木阿弥は残念だが折り込み済みの未来である。

それでも一時、場所や関係や面子を限定したところでは、少々の改革は可能だ。大変化はなかなか生じないが、小変化に意味がないわけではない。その小変化が思いがけないところでの新たな変化のきっかけになる場合も少なくない。

何故こんな事になったのか、誰も分からなくなってしまった頃に、従来には考えられなかった事態が生まれることもありうる。システム論者はそのように考えるから、そこに向けての試みも空しくはない。

その上で、そう簡単に既存の社会システムが変化するとは思っていないことは、やはり明らかにしておきたい。

## 具体的実践

対象へのアプローチと変化を、今いる場所で論理的に考えることそのものが、既存のシステムに対して、因果論的な絡め取られ方を避けられないのは覚悟しておかないといけない。私達が状況から独立して、何かを考える事など不可能である。



最近のことから書き始める。2016年3月、奈良県広陵町で団士郎家族マンガ展が開催された。きっかけは、地元出身の社会人大学院生Nさんである。

彼女は教員として働きながら子育てをし、定年退職を迎えた。そして大学院で学ぶ選択をしていた。

地元中学校で長年教職にあった彼女は、今後は地域の子育て支援に何か貢献できることをしたいと語っていた。そして入学初期には、修論構想のステップとして、あちこちの子育てサークルや、先進的保育実践などの調査を始めていた。

こういう関心や調査を、よくあるものだと言ってしまうと身も蓋もないが、実際そう言える面もある。時代の必然を踏まえているということは、既に多くの試みの実現されてきたフィールドなのである。それにも関わらず、相変わらずテーマとして登場するのは、実際にはなかなか成果への道筋の見えにくい事であることも示していた。

そしてその後、出会うことになった地域に暮らし、老いていく老女達の地域ネットワークの姿に焦点を当てた「観音堂に集う女達」と題した修士

論文を書き上げた。そこには、土地の上に「人の記憶」によって刻まれた、地域の歴史があった。

## 家族応援プロジェクト

2011年3月11日の東日本大震災・津波被災は、日本社会に甚大な影響をもたらし、今に至っている。立命館大学大学院応用人間科学研究科では、京都という遠隔地から、被災地に向けて出来る発信はないだろうかと考え、実現に結びつけて今に至る事業がある。それが東日本家族応援(十年)プロジェクトである。

これは東北被災地の街で1~4週間、家族パネル漫画展を2011年から2020年の10年間、継続的に毎年行う。そして週末には出向いて行って、子育て支援者や被災地住民向けの、対人援助実践プログラムを開催するものである。

直ぐに効果の出るようなモノではないが、大震災という大きな物語に取り込まれてしまった個々人の小さな物語(思い出)を、別の場所、別の時代に生きた家族の物語に触れることを通して取り戻すことを意図した。そして時と共に起きる身勝手な世間の風化を防ぐ、細く長くの支援を考えてきた。(詳しくは、本誌連載中の村本邦子「東日本家族応援プロジェクト」を参照)

## 広陵町マンガ展

Nさんは院生として、このプロジェクトに参加していた。これが卒業後、地元でマンガ展を開くことに繋がっていった。

広陵町での実施ということになると、これは被災者支援ではない。幅広い、子育て渦中の親御さんへの支えにならなくてはならない。

今、子育て支援プログラムは、全国各地で、恐らく想像を絶するほどの数、実施されているに違いない。ここでその効果や成果をあれこれ言えるほど、実態は知らないが、私達の社会が持っているメニューは、典型的で、いかにもやりましたとアピールするだけの短命なモノに陥りやすい。

待機児童問題が未だに課題になる社会が、

同時に少子化時代でもあるという、笑ってしまうような矛盾。

そのひとつひとつがどうこうではなく、そこにある隔靴搔痒感を一步脱することが出来ないまま、様々な対策は長い時を経てきたように思う。子ども虐待対策にどれほどの専門家と予算を動員してきただろう。そしてその結果を、私達は現実として引き受けている。

そんなところで、一筋の光明を見た気がする出来事を経験したので、ここに書いてみることにした。

## 子育て支援プログラム

「地域の子育て」という単語を、流通しやすい文言として使ったところで、従来の歩みから一歩も踏み出すことは出来ないだろう。

広陵町はNさんが生まれ、育ち、家族を設け、子育てをした場所である。そして同時に、教員として40年勤め上げた土地でもある。そこにはその年数だけの教え子が居て、巣立っていった。

これは全国各地、特に地方の街にはきつと、同じ状況が存在しているだろう。そして今までも、その退職者の人柄や意志による取り組みは、行われた経過があるにちがいない。

例えば家裁の調停委員として、退職教員が関わる事も多いと聞いた。それが近年、減ってきているという話。何が変化してきているのか、考えてみる必要があるだろう。

教員であったことを資源に、地域の子も達の学力保障、支援にボランティアの私塾のような取り組みをする人もあると聞く。

教員退職者のための天下り対策だとの指摘もある学校相談員(いろんな呼び名があるようだが)。主に退職校長の再任用職になっているものは、たしかに、子どものことや、子育て中の親のことを考えて作られているとは言えない。

そんな町のひとつ広陵町で、子育て支援の取り組み(児童虐待防止も念頭に)として、家族マンガ展と講演会を開催した。展示作品は5話(展示パネル数21枚)で会期は2週間。

この間、会場受付にはNさんがずっと詰める。これは、東北各地で開催継続中の方式と基本的に同じである。

漫画パネル展ギャラリーは作品を鑑賞して貰う場であると同時に、そこにこめられたメッセージを噛みしめ、しばし佇む場所でもある。

東北被災地では、たまたま来場された方が、会場に詰めているスタッフ(大学院生)に、作品の話題に重ねながら、被災体験を語り始めることが時々あった。

家族の物語に溢れた会場が、自分の物語を語り始める場になる。東北の場合は被災と不可分な自らの家族物語が語り出されるきっかけの場になった。

しかし広陵町にそんなシビアな経過は存在しないから、ごく一般的なイベントとしてのマンガ展の来客が私の目には浮かんでいた。

## 何が起きたのか

そして実際に開催された場で起きたことは、振り返れば、納得のいくことであるが、恐らくこんな事は今まで考えたことがなかったらと思うことだった。

会場を図書館ロビースペースに設営していた。これは、むつ市、多賀城市と同様である。日常生活の一部なのであろう、いつものように図書の返却に訪れた女性は、Nさんの教え子だった。地元開催である。意図せざる、しかし必然性の高い再会であった。

企画された中学卒業二〇周年同窓会などで久しぶりに元教師と元生徒が会うのとは違った、驚きを伴った邂逅だった。

そこには、学校時代の序列の匂いの漂わない、偶発的喜びがあった。同窓会ならクラスメートとの話に夢中で、話しかけなかったかもしれない元生徒が、「先生！」と話しかけた。

マンガ展の受付テーブル付近は、溢れる過去と現在が交錯する時間になっていった。偶然の出会いを受けて来訪者は昔を語り、現在の子育てを語り、家族を語った。

展示会場は融通性の高い空間である。長時間居たとしても迷惑がかかるわけではない。子どもがウロウロしても、大声で騒がなければ了解される安全な図書館の一隅である。

## そこでは

マンガ展は二週間、継続開催されていたから、連日のように訪れる人もいた。夫を連れてきたり、地元で暮らす親を誘って再訪したりと、さすが地域社会と思わせる動員の多様さである。そしてこれらを支えたのは、Nさんの教員としての長い蓄積だった。この要素が一般的な展覧会とはおおく異なった空間を作った。

今日社会の定年退職者の現状を考えてみよう。ことに豊かな老後を約束された教員、公務員、大企業リタイア組は、文字通り仕事を離れ、悠々自適の生活である。

しかし、実際は多くの高齢者が厳しい老後を迎えざるを得ない現状にあるとNHKスペシャルでは報道され続けている。四分の一くらいの富裕高齢者を除けば、後はなかなか厳しい高齢化社会の到来だと言えるようだ。

ここではその問題は置くとして、ゆとりがあると言われている安定した高齢者に焦点を当てたい。

なにがしかの専門的知見を蓄えて、永年のキャリアを積み上げた団塊世代とその上世代。この人達を、欧米型のリタイアのまねごと消費者へと誘うのは何故なのだろうか？

Nさんは間もなく年金暮らしの地元出身者である。地元には今、子育て真っ直中のかつての教え子達がたくさんいる。そこには夫のDVに悩む妻や、児童虐待と通報されそうなギリギリの孤独な子育て営むお母さん達もあるだろう。

その人達の一部とでも、Nさんがこの図書館ロビーで遭遇していたら、ひょっとして、子育て支援や、児童虐待の予防機能が果たせていたのではないかと想像したのだが、いかがなものだろう。

私達は、何かが起きてから騒ぎ立てるのに慣れすぎている。そして、何かを予防する話をし始めると皆、過激派になる。

「それで、ゼロになるのか！」と言うのだ。何であろうと「ゼロ」を目指す等というのは過激派の主張でしかない。

システム論者は、過去にあって、今もあるものは、未来もなくなることはないと考える。しかし、だからしょうがないのではなく、1000あるもの

なら800にならないか。500にするには、どうすればいいだろうと考える。

## 子育て支援

地域の子育て支援を、予防の視点から考えてみたとき、その対応資源として、地元の退職教員、公務員に担ってもらうのは理に適ったことではないかと考えるが、いかがなものだろう。

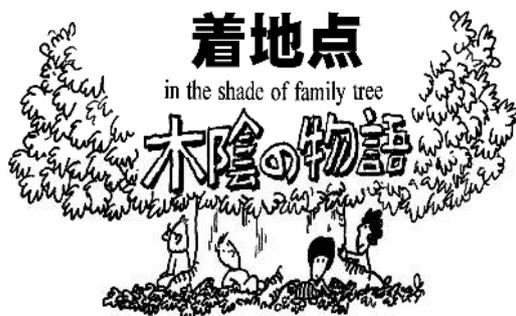
私たちの社会は、個人を強調しすぎたあまり、地域ネットワークを失った。そして縁もゆかりもない場所に戸建てを建てて、上手くいく時だけ、上手くやった者だけが暮らせる生活に舵を切った。

しかし人の暮らしは決して、個人主義で完結してしまえるほどすっきりはしていない。誰かの世話にならずに一生を全うするのは難しい。つまり、お互い様の一翼は担わねばならないということである。

だからといって、いきなり私たちの暮らしにホームパーティや、教会での日曜礼拝を持ち込めるわけがない。だから、リタイア後の悠々自適生活の欧米型デザインも合っていないのである。

私たちのこの狭い国では、お互いが姿の見えるところで時を経て、役割交代をしながら、お互い様生活のデザインを刷新していくしかないのではないか。そのヒントが今回の広陵町マンガ展会場に見て取れるのではないだろうか。

## 漫画 木陰の物語



二人が育ったのは急速に過疎化するすずんだ田舎。

成績優秀な加奈子は都市部の名門校に進み、高校時代から下宿暮らし。



どちらか言うところではない方だった佐織は地元の商業高校に入学。



三年後、加奈子は希望の大学に合格し、東京に出た。



過疎の島々を  
つないで  
架けられた橋と



誰もが車を  
運転する  
ようになった  
時代の恩恵。



下の子は近所の  
お婆ちゃん達が  
こぞこぞ  
子守してくれる。



若者流出が  
著しい地域で、  
彼女たち夫婦は  
希望の星。



佐織は同級生と恋愛し  
程なく妊娠。



卒業後直ぐ、  
大きなお腹で  
できちゃった結婚。



二人目を二十歳で産んで  
今では二児の母。



娘の小学校入学を  
きっかけに、昔の夢を  
叶えたいと思い、  
美容師学校に  
通い始めた。





建築現場で働く夫も、  
周りの人たちから  
息子のように、  
よくして貰っている。



故郷の両親からは、  
「やっと仕事が終わる」  
と安堵の音が届く。



一方、加奈子はこの春、  
大学院を卒業する。



親がそう思うのは  
当然だろうから、  
加奈子は  
何も言わない。

希望する  
専門職の  
採用通知は  
なかなか  
届かない。



しかし実際は、  
卒業すれば早速、  
奨学金の  
返済も始まる。



卒業年度の  
景気による  
運、不運も  
噛みしめる  
日々だ。



でも、何の経験もない専門職希望の  
新人に、仕事の口はそんなにない。



まだ何も始まっていない。



児童心理を  
学んだ私が  
母になれるのは、  
いつたい  
何時の事だろう。



これから  
どうなるだろう...



と思いながら、希望一杯だった  
高校合格の日のことを  
思い出すという。



恋愛も結婚もそれからのことだ。

経験を積んで、正規雇用され、  
生活が安定するのは  
何時のこと  
だろうと思う。



先ずは自立した  
経済生活の為  
とにかく仕事！



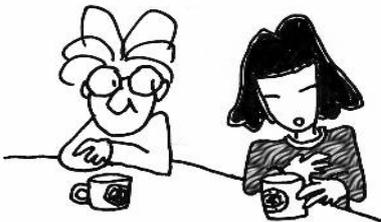
自分は努力して  
やっと専門職の  
卵になったが



まさか九年後が  
こんな風だとは  
夢にも思わなかった。



気がつく、  
夜空に向かって  
そんな決意を  
繰り返して  
るんです…  
と苦しい  
しながら語った。



これは10年ほど前、私のところの大学院生が修論のために調査した極めて個人的体験に近い事実である。

ここに私達は、日本の偏差値教育が形成している非社会性を読み取ることが出来るだろう。地元生活の彼女と、院生の彼女がそれぞれ、自

分の意志的選択として今を選び取っているならば、何も言うことはない。

だが現実社会がそうではないことは誰もが知っている。教師も生徒も親も、みんなが予備校が算出した偏差値に振り回されている。

このマンガのように、誰かの未来の可能性、可塑性を承知した制度になっていないことを考え、変化を作りだす力が弱い。煽って作り上げた偏差値ピラミッド体制が、ちっとも人々を幸せにしていないにも関わらず、変わるつもりがない人も少なくない。

予備校企業は少子化対策として、他業転出を熱心に画策しているし、学舎の転売も実行している。それなのに他人事だと考えているとしか思えない教員だけが今も、過去の民間受験業者の設定したルールに載っかって指導している。

この作品は、今日社会の有する実態に目を向け、そこに形成されているシステムに焦点を当てている。そして小さくても良いから変化の芽を探ろうとした。

## 現実

敗者のルール、失敗のメカニズムは、しばらくすると上手く行かなくなってしまう勝者のメカニズムよりも可能性を秘めていることがある。

非常勤専門職として次年度の契約がどうなるか不安を抱えながらスタートしたスクールカウンセラーの彼女。一方、地元でいつか自分の美容院を開設！と魂胆しつつ、修行勤務をしながら、子ども達の成長を見守るお母さん。もうどちらかが、どちらかに優越感を持ったり、劣等感を感じたりする必要もないだろう。

私達はもっと、我々の持つ現実に確かな目を向けなければならない。偏差値教育のもたらした志の低さを自戒すべきである。

昔、ドイツのマイスターは名誉ある職であり、わが子を継がせるに値する選択肢であった。ところが誰もが高等教育を受けられる社会になり、職人を目指したりするのは、学力がそれ程高くない者たちという世界的風潮を受けて、学力の高い子ども達を育てた職人(親)は、自分の子に

高等教育を受けさせたがった。そして出来の良い子達は皆大学に行き、職人にはならなかった。その結果、マイスターに至る職業選択をする者の社会的価値が低められた。

大学を出てホワイトカラーのサラリーマンになった者が皆、良き社会人として、この世界を支えたわけではないのを、私達は知っている。

更にそれに留まらず、例えば米国で医師になる教育を受けた優秀な人々が雇われる保険会社。そこでの仕事は、医療保険の給付額をいかに抑えるか、患者の治療費を削るために医者としての知識を駆使する。そして一人の患者も治療せず、時には治療の選択肢を奪うことで、自身は莫大な給与を得る。

能力や技術が、己の経済生活を支えるだけの手段になった。

ドイツの職人世界の衰退、劣化が進んだ。同様のことが戦後の日本社会でも起きた。近年、調理師を初め、伝統工芸職など、職人世界への回帰が散見される。とても良いことだと思うが、自認インテリ親は相変わらず、わが子がそうなることをまだためらっている。一般論としては賛成だが、わが子がそうすることには賛同できない。こういうメンタリティが社会を変革することを妨げ、既得権の世代伝達に向かわせる。

## おわりに

大雑把だが、こんな歴史経過が過去にあった。我々の世界は、こういう馬鹿げたことを、繰り返すシステムなのだということは承知しておくことだ。

さて、地元に残った彼女のこれからの人生は、どのように展開してゆくだろう。この経過だから美容師の彼女は幸せになり、SCになった彼女は不安定雇用のまま、幸せにはなりませんでした、などと語るのもまた愚にもつかない因果論である。

結婚した人は離婚の可能性を、健康な人は病気の可能性を、生き物を育てている人は、その中に僅かな死の可能性を秘めると考えるのが、システムを分かった人間である。

こういう相対化が成立したところで、今後の私達の社会システムの構築デザインに目を向ける

のがシステム論者の責務であろうと考えている。